

柑芦会 本部 ニュース

第 28 号 2021. 11. 1.



wakayama
univ.

国立大学法人
和歌山大学

—そして ここから—



1. 支部だより

神戸支部

オンライン支部総会開催

神戸支部 支部長 平林 義康

神戸支部では去る 10 月 2 日（土）に支部総会をオンラインで開催しました。昨年に引き続き 2 年連続です。

ご存知のように、9 月末日を以ってコロナの緊急事態宣言が解除されましたが、宣言の再々延長という最悪の事態を想定して、支部総会は、WEB 会議システム Z o o m を使用してオンラインで開催することを 9 月初旬に決断しておりました。

当日は、23 名の出席で開催されました。内訳としては、神戸支部から 15 名の会員、本部および他支部の幹部 5 名ならびに現役学生 3 名であります。

北村柑芦会会長のご挨拶に続いて芦田経済学部長のご挨拶（小生がご挨拶文を代読）の後、現役学生 3 チームの代表のプレゼンがありました。その後、支部の活動報告および計画、会計報告および予算案その他が報告、提案され、審議の結果、いずれも異議無く承認されました。そして、当初予定していなかったマグレビ・ナビル副学長（前経済学部長）のミニ講演会があり、支部総会は無事終了しました。

主なポイントを少し詳しくご報告いたします。

現役学生 3 チームは、今春の全国学生選手権大会で大活躍した硬式野球部、交響楽団、ソーラーカープロジェクトですが、それぞれのチームの代表からは、活動への取り組み状況等を写真入りの資料を示しながら説明して頂きました。

マグレビ先生のミニ講演会は全世界の大学のランキングに関するお話でした。先生は 2022 年の経済学部 100 周年に照準を当てて論文を書き上げると言われていましたが、お話の中で特に興味深かったのはランキングを決めるファクターが 6 項目あり、その合計点でランキングが決まるとのことです。

その項目およびウエイトは以下の通りです。

①academic reputation（学術的な評価） 40 ポイント

- ②企業の評価 10ポイント
- ③教員一人当たりの学生数 20ポイント
- ④citation per faculty (論文の他の論文への引用件数) 20ポイント
- ⑤外国人教員数 5ポイント
- ⑥外国人学生数 5ポイント

日本の大学は年々そのランキングが落ちてきている一方、特に中国の大学のランキングが目覚ましく上がってきているそうです。

なお、参加者のご紹介の箇所でマグレビ先生を大学からのご参加として紹介しておりませんが、実は当日は、神戸支部の会員としてご参加されております。

マグレビ先生は、和歌山大学大学院経済学研究科修了の柑芦会会員でもあります。そして、3年前の神戸支部総会にご出席された際に、奥様とともに神戸支部に入会を申し込まれ、神戸支部会員になりました。奥様も大学院修了者であります。

時間超過はあったものの非常に充実した（オンライン）支部総会でした。

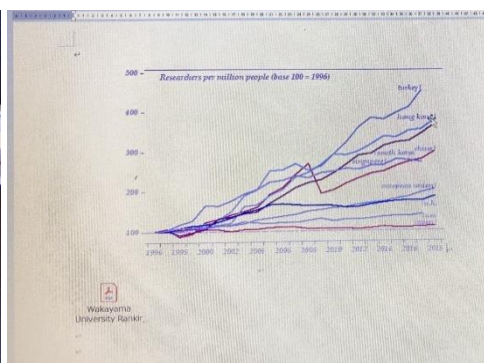
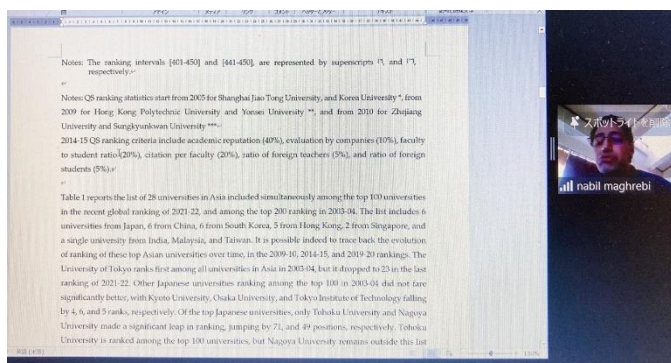
オンライン支部総会参加者（一部）



北村会長



マグレビ先生ミニ講演会資料（一部）



香川支部

2年ぶり、2021年度香川支部総会開催

香川支部長 島田新市（大学22期）

香川支部ではここに来てコロナ収束の兆しもあり、2年ぶりとなる総会を2021年10月17日(日)、高松市生涯学習センターまなびCANで開催しました。

当日は、来賓として北村会長、平林神戸支部長、そして硬式野球部現役学生さん2名、香川支部会員7名、合計11名の参加となりました。

来賓挨拶では、北村会長から柑芦会活性化に向けての取組と大学の状況、平林神戸支部長からは神戸支部の状況等のお話をいただき、次に香川支部活動報告、決算報告、役員改選決議、また「和歌山大学創立70周年記念事業」への寄付等について審議決定し、今回の目玉企画に移りました。

まず、辻支部活性化支援委員会委員長のご縁とお手配により、当支部としては初めて旭堂南海師匠をお招きし、講談「和歌山大学物語前編」をご公演いただき、和歌山大学経済学部、その前身の和歌山高商の発足秘話等、大変興味深く、また楽しく拝聴し、母校の歴史を感じ誇らしい気持ちになりました。

続いて、国立大学としては異例の近畿地区1部リーグでの大活躍、今年度春季は代表決定戦を勝ち抜き全国大会に出場、大いに和歌山大学の知名度向上に寄与された硬式野球部の現役学生さんによるプレゼンで大いに盛り上がりました。

懇親会は、大学31期の梶正司副支部長による乾杯で始まり、出席者全員の自己紹介と近況報告、大学時代の思い出などに話の花を咲かせ、名残惜しくも大学11期の山上武司相談役による一本締め、最後に和歌山大学学歌清聴で閉会となりました。

今回は、コロナの心配もゼロとは言えず、参加者も多くはなかったのですが、11期から71期まで世代を超えた交流ができ、また、北村会長、平林神戸支部長には何かとご支援いただき、おかげでこれまでの枠を少し超えた総会を実施できました。また、参加された大先輩からも「思い出に残る総会であった」との感想を頂戴しました。

改めて運営に協力いただいた方、出席頂いた皆様にお礼申し上げます。

（香川支部役員 敬称略）

〔総会全景、窓は開けて密回避〕

支部長	島田新市（大22）
副支部長	梶 正司（大31）
幹 事	和田直樹（大43）
相談役	山上武司（大11）
相談役	豊田 洋（大12）
相談役	泉丸佳久（大14）



【歳の差 60 歳、世代を超えて】

【熱い旭堂南海師匠】

【頼もしい硬式野球部】



2. 寄稿一①



和歌山大学で まちづくりを学ぶ学と その後の進路

経済学部教授 足立 基浩

私は経済学部の教員であるが、その主な研究内容は「まちづくり」である。「まちづくり」という学問の範囲は、社会学、経済学、経営学、都市計画、都市工学など実に様々な分野の研究があり、学際的といえる。しかし、私のゼミでは主に和歌山市のぶらくり丁商店街の活性化などをはじめとした中心市街地活性化について主に講義を行っている。毎年 9 月には、イギリスの各地にゼミ生を引率し、現地視察を行っている(現在はコロナの影響で実施していないが 2001 年から 2019 年まで実施)。

ゼミ研究の最終的な目的は、元気がなくなりつつある商店街地区などにおいて、にぎわいを取り戻すことである。

私のゼミ生たちも、まちづくりを学びながら、ぶらくり丁再生のために日々知恵を絞っている。2005 年以降、中心市街地において、オープンカフェ事業を実施し、実に様々なイベントを実施してきた。野村証券和歌山支店との協働カフェ、和歌山大学附属小学校の生徒さんたちとの協働カフェ、地元の農業者と連携してミカンの販売なども行った。カフェでは、主力商品として、元の磯ノ浦のシラスを提供した。

2013 年 11 月には、「ぶらくり丁で結婚式をあげませんか」という名タイトルで、商店街を舞台に結婚式のお手伝いを行うことをゼミ生たちが企画。地元の新聞社を経由して公募を行ったところ、3 組の応募があり、これら 3 組の皆さんに対してウエディングドレス、ウエディングケーキ等の提供、簡

単な料理などをふるまった。もちろん参加費用は無料。スポンサーを募ることに、学生たちは日々奔走し、無事に終えることができた。その後、2018年9月には近鉄百貨店処とゼミ生がコラボレーションをして、同百貨店5階の特設会場で独自のカレーライス「梅カレー」を開発し、販売したところ飛ぶように売れた。

思えば、和歌山大学の良いところは、こうしたまちづくり教育の実践の場が実に身近にあるという点である。そして、雑音が入らないこの静かな場所で、自然に物事を考える癖が身に付く、という点も魅力的だ。

こうした経験は、その後の進路や生活にも少なからず影響を与えているようだ。

まちづくりの広報が好きだった学生のうち、数名はネットの技術を含め広報テクニックを学び、その後テレビ局のアナウンサーや大手通信局の記者になり、都市システムを極めたい学生は、都市計画分野と地方自治法を学び、和歌山県庁、大阪府庁、神戸市役所、和歌山市役所などに就職。また別のゼミ生は「新しい地方創生の法律を作りたい」と行政法を学び、総務省のキャリア官僚となった。NTT西日本に就職した卒業生は転勤先の熊本市での地域づくりのリーダー役を務めたという。

足立ゼミでは1年に一度8月のお盆の時期に「まつり」と称して、現役のゼミ生と卒業生との交流の場を持つことにしている。たまに会う卒業生の目はいつも皆輝いている。職場に限らず、日々の生活の場でもこの和歌山という地で学んだ貴重な経験を是非とも生かしてほしいと思う。

2. 寄稿②



2021.10.10

柑芦会の会計について

岡山支部長

真下義則（大15期）

（年次総会での賛否とは別に、かねてより考えていたことをまとめたものです）

柑芦会の財源（入会金収入）確保のスキームには会計フローとして無理がある。「柑芦会会則」第24条（入会金）で「**正会員は、会友となったとき（つまり入学時）に入会金として金23,000円を納付するものとする。**」と規定している。他方正会員とは第5条で卒業生及び承認された中途退学者だ。これが入会金徴収の根拠規定だが、納入者本人にとって入学時は「会友」（未正会員）にすぎないのに、「正会員」の義務を4年繰り上げて果たすよう定められている。会計用語で言えば、「**仮勘定で前払い**」を要求されている。本来は卒業直前に会員登録の意思を確認し、承諾した人から入会金を納入しても

らうのが加入自由の原則に沿っているのだが、柑芦会の「**財源確保、組織の安定維持**」のためにこんな強引ともいえる徴収が長年続いているのだと私は推測している。

柑芦会決算は、2015 年度「**経常増減**」（企業会計の「**当期営業利益**」）は 0.4 百万円とトントンであったが、2016 年度以降は赤字続きで 2020 年度末までの 5 年間で累積赤字は 10.5 百万円に膨れ上がり、その結果香村基金 100 百万円を含む当期正味財産残高（企業会計の「**純資産**」）は、2015 年度末 142 百万円から 2020 年度末 125 百万円にまで目減りしている。

（この間有価証券評価益が評価損に転じたことも大きい）

収支トントンの 2015 年度と赤字 5 年間平均（2016～2020）を比較してみる。経常収入は 9.4 百万円→8.7 百万円と減収。コストについては、支部活動費（現在の支部通信費補助、支部活性化費）が 1.7 百万円→2.2 百万円の微増に対し、本部活動費（支部活動費以外）は 7.3 百万円→8.6 百万円と経常収入と同規模にまで膨らんでいる。

支部活動費とは本来、入学時本部へ「預けた入会金」が卒業後柑芦会活動をする**居住地支部へ会員数に応じ払い戻しされるもの**、と私は考えている。（このスキームでは小支部の統合が必要となるだろうが）入会金の用途を決めるのは本部ではなく会員だ。現行の「支部/予算申請→本部/承認、送金」というお役所もどきのフローは主語を取り違えている。支部活動は支部会員が仕切る。

削減対象は本部活動費（経常費用-支部活動費）だ。入会金収入の減少傾向はこれからも続くだろう。とするならば大阪のど真ん中に居を構える是非も含めて**抜本的な本部活動費の圧縮が急務**である。広報活動費、本部管理費などは一旦ゼロベースで再検証すべきだろうし、毎年 2 百万円の『柑蘆』印刷費も聖域にすべきでない。**支部活動費に重点配分（払い戻し）しつつ本部活動費は思い切って圧縮し「経常増減」トントン（キャッシュフロートントン）を最低維持する**、これが柑芦会会計のあるべき財務構造だろう。

以上

「柑芦会の会計」に関する真下義則様のご意見について

会長 北村修一 （大 18 期）

別掲のように、真下様から柑芦会の会計についてのご意見をいただきましたので、私からも少しコメントをさせていただきます。

先ずは、柑芦会の現状をご心配いただき、その運営の根幹にかかわる貴重なご意見を思い切ってご提起をいただいたことに感謝申し上げます。ご指摘のように、柑芦会の経常収支が 2016 年以降赤字が続いていることは事実です。またその中で予算総額から支部活動費を差し引いた「本部活動費」が増加していることもご指摘のとおりです。これについては、毎年の理事会や支部長会議などにおいてもご説明させていただいているとおりですので、真下様には正しくご理解いただいていると存じます。ただその理由や背景などについては少し補足説明をさせていただきます。

先ず、「本部活動費」が増加している主な理由は、「柑芦ニュース」（タブロイド判、毎年 1 回 3 月発行）を 2018 年度から全会員に直送することにしたことによる印刷費と郵送費の増加によるものです。この目的は、①会員の消息確認の精度向上と、②会員への広報活動の充実のためです。同じく年

1 回発行の「柑芦」誌は原則として年会費納入者のみに送付されていますので、「柑芦ニュース」のほうは会員の皆様への最低限の広報サービスとして全会員にお送りし、その返送状況により会員の住所情報の確認もできているというものです。

真下様からは、「本部活動費」を思い切って圧縮し経常収支をトントンにすべきとのご意見をいただいておりますが、私もそのとおりだと考えます。できることならばそうありたいとは願っていますが、一方では3月と9月の支部長会議などにおいて多くの支部からは「広報活動や会員の名簿・アドレス管理は本部で集中的にやってほしい」、「特に小規模の支部では体制も人員も不足しているので、支部の業務の軽減を図ってほしい」とのご要望とご意見をいただいております。さらには、国からの交付金が年々減少し続けている大学側からも様々な支援のご要望が寄せられています。これらにお応えしつつ、経常収支の改善を図るためには、次のような方策が必要だと考えています。

一つには、広報活動のあり方の見直しです。DXが叫ばれる時代にあって、すべての広報物を紙に印刷し郵送することを見直すことによるコスト削減が必要です。これには会員の皆様のご理解が必要ですが、検討すべき課題だと認識しています。二つ目には本部としての増収策の検討です。現在は大学への新入生からの「入会金」だけが唯一の収入源ですが、これを増やすためには例えば、各支部で集めている「年会費」（支部によって金額も違う）を本部で一括して集めることによって納付者数を増やし各支部へは納付者数によって「支部費」を配分する方法も副会長会議で検討を開始したところであります。また他大学の同窓会の多くが実施しているように、大きな節目の記念事業や大学・学生に対する支援事業のために「寄付」を募る仕組みの導入も併せて検討しようとしています。これらについては、従来の感覚を思い切って切り替える覚悟と様々な方策が考えられますので、支部長会議や副会長会議などを通して、また専門の委員会を設置するなどして継続的に検討していくべきであり、皆様のご理解と論議への参画をお願いいたします。

また柑芦会への「入会金」についてのご指摘もありましたが、このやり方は確かに強引とも考えられる面もありますが、これは経済学部だけでなく他の3学部においても同じやり方が採られているのが実態です。大学が入学金などと共に徴収し、そのうち2,000円を全学同窓会の費用として差し引いた残額を各学部の同窓会に交付していただいているもので、他の国立大学においても同様に行われている方法であることはご理解いただきたく存じます。これについては柑芦会だけで決められる問題ではありませんので、大学当局とも連携しご相談しながらあり方を検討していきたいと考えます。

さらに、「支部活動費」のあり方と支給手続きについてのご指摘もいただきました。各支部への支給手続きの実態についてはご指摘のとおりですが、これは公的な資金の使途の透明性確保の観点から、監事によるご指導に従って実施しているものですので、ご理解いただきたく存じます。またそのあり方についても、上記のように「入会金」だけを収入源とし、全支部共通の広報活動や会員の名簿管理業務などを本部が担当し、また大学や学生に対する支援事業を本部で一括して担当しているかぎりはやむを得ないものと考えております。

いずれにせよ、ご指摘は非常に重要な内容であり、時代に合わせて改善改良すべき課題も含まれていますので、真下様以外の方からも引き続きご意見やご提案をいただきますようお願いいたします。

3. 大学だより

和歌山市の紀ノ川にかかる六十谷水道橋の落橋により断水事故が発生しましたが、その際、和歌山大学の学生や職員でつくる災害ボランティア団体「むすぼら」が水の運搬を手伝いました。その様子が読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、産経新聞等各紙で紹介されました。



10月7日付読売新聞和歌山版の記事の一部

和歌山大学経済学部同窓会 柑芦会 本部 事務局

〒540-0012 大阪府中央区谷町 4-4-17 ロイヤルタワー大阪谷町 207 号

Tel: 06-6941-4986 Fax: 06-6947-7925 E-Mail: honbu@kourokai.org



フェイスブック
